

国際経済シンポジウム（ジャクソンホール会議）を控え、23日の東京市場は「開散」と呼ぶほかない相場だった。市場の関心は米利下げに関する講演内容に集まるが、日本の個人マネーは「その先」を見据える。低成長、低金利から抜け出せない経済の「日本化」だ。その受け皿ともいえる金融商品が残高を伸ばしているのだ。

レバレッジ投信に食指

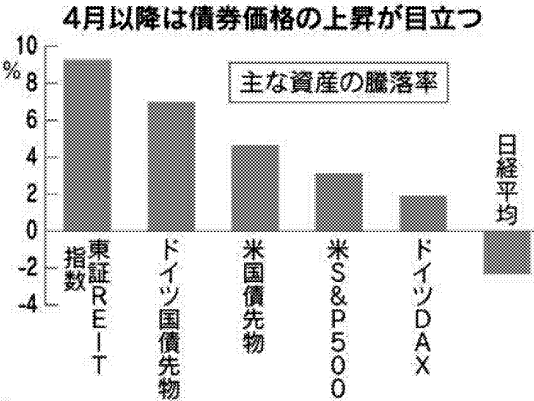
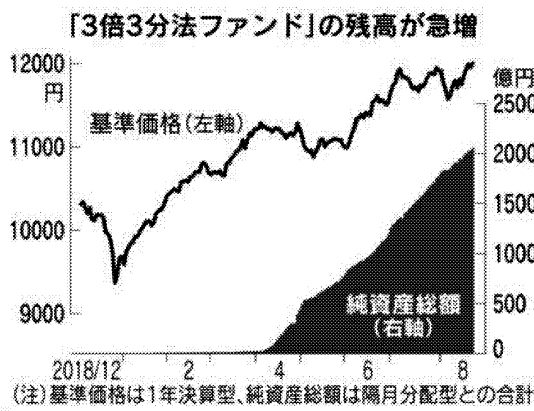


「夜のジャクソンホール式や債券、金に分散投資しだ。QUICKの調査では、不動産投資信託（REIT）と並んで債券が好調待ち。まさにリリースです。ながら、先物取引で3倍の今年1～6月の資金流入額は、例えばドイツ国債先物で、例えはドイツ国債先物日昼、大手証券のトレーダーの半分以上は日米仏の債券を合わせて計1100億円超と追加型の株式投資全体で2位だった。ここまでの手元資金の2倍相当でドイツや日米などの債券先物を組み入れ、けん引している。

材料の乏しかったこの日、資産運用業界が注目する投資信託が新規設定された。アストマックス投信投資顧問の「ウルトラバラン」だ。世界の株10月に設定した「グローバル3倍3分法ファンド」は、1年決算型の基準価格は年初から24%上昇している。ただ、好成績は「うれしい誤算」にすぎない。株価の上昇は見込めず、債券の利回りも期待できない世界でも、わずかなりターンにレバレッジをかけて資産を増やす。この投信の地力が問われるのは、そんな局面だ。資産は分散して比率は固定し、相場を読んで見直すことはしない。

「他人にマクロや市場の予想を聞くのは時間の無駄だ」。著名投資家のウォーレン・バフェット氏はかつて、こう指摘した。では日本の個人は自力でどんな道を選んできたのか。

リーマン・ショック後の通貨選択型や毎月分配型など利回りのなくなった時代に日本の投信は独自の「進化」を遂げた。レバレッジ型投信の人気ぶりは、新たにたどり着いた投資手法のようみえる。



世界の急速な債券の上昇（金利低下）は続かないとの見方がある。先週、米国で起きた「逆イールド」は景気後退のサインとされるが、米JPモ

世界の「日本化」個人先取り

ルガンの著名ストラテジスト、マルコ・コロノビッチ氏は「半分以上はテクニカルな要因で説明できる。景気やインフレ見通しなどファンダメンタル要因は半分以上だ」と指摘する。住宅ローン債権や銀行・年金のヘッジ売買による影響が大きかったとの分析だ。

米国債を起点にした世界の利回り低下が止まれば、市場は再び株も債券も動きにくい市場に逆戻りしかねない。低成長、低インフレが強まるなかで金融政策も打つ手を欠く「日本化」の指摘は欧州で広がり、米国も無縁とはいえない。

「他人にマクロや市場の予想を聞くのは時間の無駄だ」。著名投資家のウォーレン・バフェット氏はかつて、こう指摘した。では日本の個人は自力でどんな道を選んできたのか。

リーマン・ショック後の通貨選択型や毎月分配型など利回りのなくなった時代に日本の投信は独自の「進化」を遂げた。レバレッジ型投信の人気ぶりは、新たにたどり着いた投資手法のようみえる。

(証券部次長 田口良成)